

日中対照研究方法論（１）

— “給・N+V” 表現と「N・格助詞」を用いた日本語動詞表現(上)—

A Methodology for a Contrastive Study in Japanese and Chinese(1)
: “*gei*・N+V” Forms in Chinese and Their Corresponding Expressions
in Japanese using an “N・Phrase Particle” (Part 1)

成戸 浩嗣 Koji NARUTO

概 要

中国語と日本語の対照研究は、今後ますます発展が期待できる領域である。従来は、中国語、日本語のいずれか一方を主たる考察対象としつつ、両言語間の相違について部分的な記述を行なうにとどまるものが多く、内容においても、両言語間における様々な対応関係の存在を指摘するにとどまり、そのような対応関係が成立する要因の探求を主目的としたものは限定されていた。このことは、この分野がいまだ十分に開拓されておらず、考察の余地が大きいことを意味する。今後は、先行研究の記述を再検討・修正し、新たな知見によってより厳密なものとする手法としての対照研究がますます重要性を増すであろう。

対照研究の意義として最も重要なことは、個別の言語のみを対象としていたのでは思いもつかないような新たな視点を設定して言語現象の実態をより厳密に記述する一方、他言語を学ぶ際に母語の干渉によって起きる誤用のメカニズムを明らかにしてそれを外国語教育に生かせるようにすることである。研究手法は、対象とする言語あるいは言語現象により、用いられる理論により様々であるが、完璧なものが存在するとは考えにくい。いかなる言語理論であれ、言語事実をできるだけ正確に記述できるものが望ましいが、一つの手法によってすべての問題が解決をみることなど、果たして可能であろうか。しかしながら、言語学における先人の蓄積を生かしつつ、様々な新しい手法による言語の分析が行なわれることで、完全なものに近づくことはできよう。対照研究もそのような手法の一つである。

本稿では、中国語と日本語の対照研究を行なう際の着眼点、分析方法、予測される結論などについて、抽象論ではなく、“給”を用いた動詞表現という具体的な言語材料をあつかうことを通して述べることにする。周知のように、“給”には

- ①動詞としての用法
- ②いわゆる前置詞として“給・N+V”形式で用いられる用法
- ③“V給”のように動詞に後置されて用いられる用法(“把・N₁+V給+N₂”形式で用いられるものを含む)

のほか、動詞が目的語をとまなう場合には

- ④“V+O+給・N”形式で用いられる用法

が存在する。①～④についてはすでに多くの先行研究が存在し、日中対照の観点から問題をあつかったものも散見される一方、未解明の部分も少なくない。例えば②の“給・N+V”は、教育の場においては日本語の「N・ニ Vテアゲル／テクレル」¹⁾に対応する形式として紹介されるのが一般的であるが、初学者に対する説明の仕方としては一定の認知を得られても、すぐにこの対応パターンにあてはまらない例に出くわすこととなる。③の“V給”については、この形式をどのように規定するか、“給”の働きはいかなるものかにつ

いて従来から議論があり、そのことが教育にも影響していると思われる。④の形式はそもそも入門・初級の段階では登場しない。しかしながら、これに関する知識は、動詞“給”が前置詞や助詞のような文法機能語に発展していく過程において、「動詞→前置詞→副詞」のような用法の発展を経てきた“在”の場合や、“給”が“V給”形式をとりえるのと同様に動詞の後置成分となって“V在”、“V到”形式をとりえる“在”、“到”の場合とはどのように異なった展開の仕方をしてきたかについて知るために不可欠である。②～④に挙げた中国語の表現形式を、対応する日本語の諸形式と対照させることにより、各形式およびそれらに用いられる諸成分の特徴を従来よりも一層正確に記述することが可能となるとともに、学習者が母語の干渉による誤用を避けて正しく運用するための手助けともなろう。

本稿は、上記②の形式をとる中国語表現に対して「N・格助詞」を用いた様々な日本語動詞表現が対応するケースを対象として、従来の手法によっては十分に解明されなかった“給”の特徴を見だし、対応する日本語の表現形式およびそれらに用いられる諸成分についても一定の見解を提示するという目標のもと、これを達成するための考察方法について述べることを目的とする。成戸 2009 においては、“在・N(・方位詞)+V”表現に対して「N・格助詞」を用いた様々な日本語動詞表現が対応するケースをとり上げたが、“給・N+V”表現をめぐる対照作業においては、“給・N”と「N・格助詞」との対応にとどまらず、述語における「テアゲル／テクレル」、「テモラウ」、「(サ)セル」などとの対応も問題となる。このことは言うまでもなく、対応する日本語表現に用いられている述語動詞との関わりにおいて、“給”が“在”とは異なった様相を呈していることを意味する。但し本稿は、従来の方法によっては明らかとされなかった“給”の特徴や、様々な日本語の表現形式との対応関係成立の要因を見いだすことを目指すため、“給・N+V”表現に対して「N・ニ Vテアゲル／テクレル」以外の形式が対応するケースを中心とし、そのような対応関係が成立する要因について考察する意義とその方法について概観する。タイトルが示す通り「方法論」を提示することを主眼とするため、詳細な検討は別途機会をもうけて行なうこととする。

キーワード

- | | |
|-----------|------------------------------|
| 1. 受益 | benefit |
| 2. 視点 | viewpoint |
| 3. 表現構造 | expression structure |
| 4. 待遇表現 | hearer-oriented language use |
| 5. 連体修飾成分 | adnominal constituent |

目次

- 1 “給・N+V” — 「N・ニ Vする」の対応
- 2 “給・N+V” — 「N・ヲ Vする」の対応
 - 2.1 “給・N+V” と “把・N+V”
 - 2.2 “給・N+V” 表現と話者の視点
- 3 “給・N+V” — 「N・デ Vする」の対応
 - 3.1 “給・N+V” 表現の多義性と受身・使役
 - 3.2 “給・N” と 「N・デ」
- 4 “給・N(間接的受け手)+V” — 「N(動作主体)・カラ／ニ Vテモラウ」の対応
 - 4.1 受け手中心の表現形式
 - 4.2 “給” と 「テモラウ」
 - 4.3 “从・N+V” と “給・N+V”、 「N・カラ／ニ Vテモラウ」
- 5 “給・N+V+O” — 「N・ノ Oを Vする」の対応
 - 5.1 “給・N” と 「N・ノ」
 - 5.2 “給・N” と 「N・ノ」、「N・ニ」
 - 5.3 “給・N+V+O” 表現の多義性と考察の展開

1 “給・N+V” — 「N・ニ Vする」の対応

“給・N+V”表現に対しては、以下のように、「N・ニ Vする」形式の日本語表現が対応するケースがある。

- (1) 我给朋友写了一封信。
(来思平・相原茂 1993:279)
- (1)’ 私は友人ニ手紙を1通書いた。(同:130)
- (2) 今天晚上我给你打电话吧。
(郭春貴 2001:369)
- (2)’ 今晚君ニ電話をする。(同上)
- (3) 我给他寄了一包糖。(西槇 1993:42)
- (3)’ 私は彼ニあめを一包み送った。(同上)
- (4) 他给我递了一支烟。(西槇 1993:42)
- (4)’ 彼は私ニタバコを一本渡した。(同上)
- (5) 松井先生给高教授介绍了自己的好学生。
(呂才楨ほか 1986:52)
- (5)’ 松井先生は彼のよい学生を、高教授ニ紹介した。(同上)
- (6) 在车上应给老年人和残疾人让坐。
(《中级日语》:123)
- (6)’ 車内では年寄りや体の不自由な人ニ席をゆずるべきだ。(同上)
- (7) 学生给老师行礼。(《漢日辞典》“給”の項)
- (7)’ 学生が先生ニお辞儀をする。(同上)

周知のように、“給・N+V”表現における“給”はN(動作・行為の間接的受け手=与格)を示すと同時にNが表わす受け手(主として有情物)に対する利益の授受をも表わすのに対し、「N・ニ Vテアゲル/テクレル」表現においては、Nを示すのは「ニ」であって、利益の授受はいわゆる補助動詞「テアゲル/テクレル」によって表わされる²⁾。これらの点については、楊凱栄 1994:29、39、同 2009:1、4において言及されており、“給”、“ニ”は文法的な働き(名詞と動詞との格関係を表わす)をし、その有無は文の論理的な意味の増減に直接影響するのに対し、「テアゲル/テクレル」の場合は文の論理的な意味よりも談話機能上の働きに比重が置かれている

旨の記述がみられる。このことは、「テアゲル/テクレル」を付加することの可能な(1)’～(6)’において、付加の前後で表現の前提となる客観的事実に変化がない点によっても理解できよう。ちなみに(7)’や、不利益の授受を表わす

- (8) 你不应该给他添那么多麻烦。
(郭春貴 2001:372)
- (8)’ あなたは彼ニこんなに迷惑をかけるべきではない。(同:405)

における(8)’の場合には、「N・ニ Vテアゲル/テクレル」形式が成立しない(「テアゲル/テクレル」は不利益となる動作・行為を表わすのに用いることも可能であるが、少なくとも(8)’のケースでは用いられない)。楊凱栄 1994:39、同 2009:4には、日本語の受益標識は「待遇表現」の一つとみなされており、「文法概念として受益を表す“給”との間にはおのずと対応のずれが生じる旨の記述がみられ、同じく利益の授受を表わすといっても、“給”と「テアゲル/テクレル」との間に何らかの相違が存在することを示唆している。ちなみに“給”の用法の記述においては、利益の授受がモノ(=動作・行為の直接的受け手)の授受をとまなうケースとそうでないケースとを分けることがしばしばであるが、日本語との対照を行なう場合には両者を最初から分けてあつかうことはせず、その必要が認められた段階で導入する方がよからう。

“給・N+V”表現の中には、荒川 1985:15-16の記述にみられるように、“給”の「利益を与える」という側面が後退して、単に動作の相手、向かい先という側面が強くなっているものが存在する³⁾。これは、“在・N(ところ)+V”表現における“在”が、動詞として用いられる場合とは異なってNが表わすところにおける事物の存在を必ずしも前提とはしないという現象にみられるように、いわゆる前置詞“在”の語彙的意味に強弱の差異がみられることに通じる現象であり、前置詞“給”の語彙的意味にも強弱の差異があることを示唆している⁴⁾。この語彙的意味の強弱が具体的にどのような形をとってあらわれるかを明らかにするには、“給・N+V”の類義表現としてしばしば問題とされる“朝・N+V”、“向・N+V”、“対・N+V”、“跟・N+V”などとの使い分けを視野に入れた方法によるほか⁵⁾、“給・N+V”表現に対して「N・ニ Vする」表現、「N・ニ V

「テアゲル／テクレル」表現のいずれか一方が対応するにとどまるかあるいは双方が対応するかについての考察からも重要なヒントが得られる可能性がある。中国語の類義表現との相違を論じる過程においては、程度の差こそあれ、“給”の語彙的意味に起因する“給・N+V”表現固有の特徴が改めてうきぼりとなるはずである。その例の一つとして、Nが無情物を表わす

(9) 远处, 老场长正在给林子里的树浇水。

(遠くでは年のいった造林所長がちょうど林の木に水をやっている。)

(《实用现代汉语语法》: 177、『現代中国語文法総覧(上)』: 246)

のようなケースが挙げられる。動詞“給(アゲル／クレル)”がもとになった前置詞“给”は、動作・行為によって間接的受け手に利益を与えることを表わし、“给”によって示されるNは有情物であるのが典型的用法であるため、無情物を表わすNを用いた

(10) ?他给香烟点着了火。

(11) ○我给门加了一把锁。

(12) ○她给眼睛下方皮肤注射了奴弗卡因。

(13) ○他给果树打农药。

(14) ○他给瓶子灌水。

よりは、動作・行為の間接的な受け手となりえる有情物(ヒト)を含んだ

(10)' ○他给对方的香烟点着了火。

(11)' ◎我给小李家的门加了一把锁。

(12)' ◎她给病人的眼睛下方皮肤注射了奴弗卡因。

(13)' ◎他给公社的果树打农药。

(14)' ◎他给小明的瓶子灌上了水。

の方が自然である⁶⁾。同様のことは(9)についてもあてはまる可能性があり、前置詞“给”の語彙的意味の検討に際しては、このようなケースにも目配りする必要がある。

このように、“给・N+V”における“给”が、場合によって程度の差こそあれ利益授与の意味を含むためであろう、楊凱榮 2009: 1 の記述にみられるように、中国語話者が日本語の受益表現を用いる際

に、補助動詞を用いなくて「ニ」のみを用いてコトガラを表現しようとする現象が起こりえるのであり、このようなことを避けるためにも“给・N+V”と「N・ニ Vする」、「N・ニ Vテアゲル／テクレル」との間における対応関係成立の要因を明らかにしておくことが必要となるのである。

2 “给・N+V” — 「N・ヲ Vする」の対応

2.1 “给・N+V”と“把・N+V”

“给・N+V”表現に対しては「N・ニ Vする」のほか、「N・ヲ Vする」形式の日本語表現が対応する以下のようなケースも存在する。

(15) 我给自行车修好了。(興水 1985: 281)

(15)' わたしは自転車ヲ修理した。(同上)

(16) 有人给衣服揪住了。

(『岩波 中国語辞典』“给”の項)

(16)' 誰かが着物ヲつかんだ。(同上)

(17) 他喝醉了给桌子翻了。

(『中日大辞典(初版)』“给”の項)

(17)' かれは酔ってテーブルヲひっくりかえした。(同上)

(18) 你给这个拿了去吧。

(『中日大辞典(初版)』“给”の項)

(18)' これヲ持って行ってくれ。(同上)

(19) 他给梁有才叫到一边儿。

(『岩波 中国語辞典』“给”の項)

(19)' 彼は梁有才ヲそばに呼んだ。(同上)

これらの対応例においては、“给・N”の部分日本語では「N・ヲ」形式により動作・行為の直接的受け手として表わされている。周知のように、現代中国語の普通話においては、動作・行為の直接的受け手を前置詞によって示す場合は“把・N”の形をとるのが一般的である。『現代中国語辞典(“给”の項)』には、動作・行為の直接的受け手を示す前置詞“给”の働きが方言における用法として収録されており、そのような例として

(20) 请你随手给门关上!

(『現代中国語辞典』“給”の項)

(20)’ すぐにドアヲ閉めてください。(同上)

が挙げられている⁷⁾。一方、興水 1985: 281 には、このような“給”によって示されるNは事物(=モノ)を表わす名詞か人称代名詞に限られ、ヒトを表わす名詞は用いられない旨の記述がみられる。これらの記述からは、動作・行為の直接的受け手を示す“給”の用法に一定の制限があることが明白であり、直接的受け手を示す成分としてより広く用いられる“把”との使い分けを明らかにすることは、“給”の働きをより厳密に記述するために極めて重要である。

2.2 “給・N+V”表現と話者の視点

2.1 でとり上げた“給・N+V”表現について注目すべきことは、興水 1985: 281-282 が、先に挙げた

(15) 我给自行车修好了。

(15)’ わたしは自転車ヲ修理した。

とともに

(21) 他给〔自行车〕修好了。(興水 1985: 282)

(21)’ かれは修理しテクレタ。(同上)

を挙げている点である。(21)、(21)’の対応例をみて、(21)から

(21)” かれは自転車ヲ〔私ニ〕修理しテクレタ。

の意味を読みとることは、少なくとも受益者が話者であればごく自然なことである。(21)、(21)’、(21)”をみると、(15)、(15)’だけをみていたのでは気づかなかった以下のことが思いうかぶ。すなわち、(21)における“給”は、文法的な働きをする成分として“自行车”を明示すると同時に、自転車を修理することによって利益を受ける者の存在を暗示しているのではないかということであり、さらに言えば、話者の側からコトガラを表現する成分として、待遇表現とされている日本語の「テアゲル／テクレル」に通じる働きをしているのではないかということである。「テアゲル／テクレル」は「ニ」や「ヲ」によって示される格関係と切り離されて用いられる

のに対し、(21)における“給”は、文法的な働きを主としてにないつつ、事実を表わすにとどまらず話者の視点を前提としてコトガラを表現する働きをも備えるに至る過度的形態であるとみて、この方向で考察を進めていくことも無意味ではなかろう。このことは、(21)のカッコ内を含まない

(22) 他给修好了。(かれは修理しテクレタ。)

(興水 1985: 282)

が、話者への利益の授与を表わす

(22)’ 他给我修好了。

と同様の内容に解することも可能であるということとも矛盾せず、これらの表現における“給”の働きについて検討を加えることにより、上記のような働きを備えるに至った過程について明らかとなる可能性がある。ちなみに、興水 1985: 281-282 には、(21)にみられるような“給”(=目的語を明示することができないか、明示する必要のない時にNを省略することが可能な“給”)を助詞としてあつかう考え方が存在する旨の記述がみられ、《現代汉语八百词(“給”の項)》、《現代汉语词典(“給”の項)》においてはそのようなあつかいがなされている。前述したような見方をするか否かは、前置詞“给”が、動作・行為の間接的受け手を示す用法からさらにすすんで、日本語の「テアゲル／テクレル」のような非文法的な働きをも帯びるに至っているとみるか否かにつながる。このような考え方が有効であるかどうかについては、ネイティヴ・チェックを重ねた上での慎重な検討が必要であるのは言うまでもないが、(15)のような表現から予測される

(23) *彼は自転車ニ修理した／しテクレタ。

のような中国語話者による誤用を避けると同時に、日本語における「ヲ」格と「ニ」格の使い分けについて改めて見直すきっかけともなり、一考の価値はあろう。

3 “給・N+V” — 「N・デ Vする」の対応

3.1 “給・N+V”表現の多義性と受身・使役

“給・N+V”表現の中には多義性をもつものがあり、「N・ヲ Vする」との対応例にもそのようなケースがみられる。興水 1985 : 281 によれば、

(24) 警察给他抓走了。

(25) 我给他治好了。

は、それぞれ

(24)’ 警官はかれヲつかまえていった。

(25)’ わたしはかれヲなおした。

(24)” 警官はかれニつかまえラレタ。

(25)” わたしはかれニヨッテなおった。

のいずれにも対応しえる⁸⁾。

(24)”に対応する受身表現として(24)が用いられるケースについては、“給”の働きのうちヴォイスに関わるものとしてしばしばとり上げられ、先行研究も少なくない。“被”、“叫”、“让”などをも含めた中国語における受身表現の考察対象としても、日本語受身表現との対照素材としても極めて興味深いものである。受身の表現形式として用いられる“被/叫/让・N+V”については、これら相互の比較や、日本語の受身形式である「N・ニ V(ヲ)レル」との対照を行なった先行研究が数多くみられるが、さらに“給・N+V”を加えて再検討し、新たな知見が得られる余地がないかをさぐってみる価値がある。ちなみに“給・N+V”は、“叫/让・N+V”と同様に使役表現として用いることも可能な形式であるため、受身、使役の双方を視野に入れてその使い分けをさぐることによって、“給・N+V”表現についてのより厳密な記述が可能となろう。

一方、(25)”は中国語表現である(25)の逐語訳という性格を帯びているものの、

(26) ?わたしはかれニ(ヨッテ)なおさレタ。

よりは許容度が高い自動詞表現である。(25)の“给他”は、(25)”においては「なおす」の主体として「かれニヨッテ」の形で表現されているが、述語動

詞が自動詞であるため、「なおる」という出来事を引き起す原因となっている。

3.2 “給・N”と「N・デ」

“給・N”に対応する日本語成分が出来事を引き起す原因を表わす点においては、“給・N+V”表現に対して「N・デ」を用いた日本語自動詞表現が対応する以下のようなケースも同様である。

(27) 门给风吹开了。

(《現代汉语八百词》“给”の項)

(27)’ ドアが風デ開いた。

(『中国語文法用例辞典』“给”の項)

(28) 衣服给雨淋湿了。

(《現代汉语八百词》“给”の項)

(28)’ 服が雨デぬれてしまった。

(『中国語文法用例辞典』“给”の項)

(27)、(28)の“给风”、“给雨”は、(27)’、(28)’においてはそれぞれ「風デ」、「雨デ」により、「開く」、「ぬれる」という出来事の原因として表現されている。

中国語の受身表現に対して日本語自動詞表現が対応するケースについては、両言語間における表現構造上の相違としてとらえることができよう。その上で改めて上記の対応例に目を向けると、(25)、(25)”、(26)からは、意志的な動作であっても自然に生じたものとして表現する日本語の傾向が、(27)、(27)’および(28)、(28)’からは、自然現象であっても“給・N+V”形式によって表現することが可能な中国語の特徴が改めてうきぼりとなる。

“給・N”に「N・デ」が対応する例としてはこのほか、例えば

(29) 他一不小心给镰刀划了个口子。

(《現代汉语》)

(29)’ 彼はふとした不注意から鎌デ切り傷をこしらえてしまった。

(『現代中国語総説』: 289)

のような、いわゆる他動詞表現が対応するケースが存在する。(29)の“给”は受身を表わす働きをになっており、普通話であれば“被”が用いられるところである。(29)においてはコトガラを組み立て方が

(29)’とは大きく異なっており、このような対応例からは、日本語の授受表現や受身表現との対照を行なった先行研究においてはあまり注目されなかった“給・N+V”表現の特徴を見いだす重要なヒントが得られよう。「手段——動作・行為」の関わりを表わす点で「N・デ Vする」と共通する“用・N+V”表現との使い分けも視野に入れ、意志性の有無による“給・N+V”、“用・N+V”の使い分けがあるか否かについてさぐることも重要と思われる。

4 “給・N(間接的受け手)+V” — 「N(動作主体)・カラ／ニ Vテモラウ」の対応

4.1 受け手中心の表現形式

“給・N+V”表現に対してはさらに、「N・カラ／ニ Vテモラウ」表現が対応する以下のようなケースが存在する。

(30) 朋友给我讲学校的事情。

(《現代日本語語法》：603)

(30)’ 友達カラ学校のことを話しテモライマス。
(同上)

(30)’の「カラ」は「ニ」に置き換えることも可能である。両者の使い分けについて述べたものとしては森田 1988：317-323などが挙げられるが、この点を視野に入れた記述は本格的な検討に入った段階で行なうこととし、本稿ではひとまずおく。(30)’は、動詞「モラウ」を用いた授受表現がそうであるように、話者の視点が間接的受け手(非動作主体)の側に置かれている⁹⁾点において(30)のような“給・N+V”表現の場合とは異なる。(30)、(30)’間にみられるこのような相違は、(30)に対応させることが可能な日本語表現として

(30)” 友達は私ニ学校のことを話しテクレマス。

のような、“給・N+V”表現の構造をより忠実に反映させたものが別に存在することからも明白なように、表現構造上の相違でもある。ここを切り口として、「N(動作主体)・カラ／ニ Vテモラウ」、「N(間接的受け手)・ニ Vテクレル」についての先行研究の記述を参考に、話者の表現意図との関わりまでも含めた“給・N+V”の用法について再検討する

ことができよう。

「N・カラ／ニ Vテモラウ」表現に対しては、使役の“让・N+V”形式に“給・N”が含まれた表現が対応する以下のようなケースも存在する。

(31) 我让叔叔给我摘了苹果。(穗积 1987：313)

(31)’ 私はおじさんニりんごをもぎ取ッテモライマシタ。(同上)

(32) 我打算让小杨给我打电话。

(《現代日本語語法》：603)

(32)’ わたしは楊さんカラ／ニ電話をかけテモラウつもりです。(同上を一部修正)

(31)、(32)においては話者が同時に動作・行為の間接的受け手であり、その受け手が表現の中心に置かれている点で(31)’、(32)’のような「N・カラ／ニ Vテモラウ」表現と共通しているため、例えば

(33) 叔叔给我摘了苹果。(穗积 1987：313)

のような“給・N+V”表現の場合よりも両言語間における表現構造上の相違は小さいということができよう。(33)は、穗积 1987：313においては

(33)’ おじさんは私ニりんごをもぎ取ッテクレマシタ。(穗积 1987：313)

に対応する中国語表現として挙げられているが、(30)、(30)’の場合と同様に、(31)’に対応させることも可能であろう。

「N・カラ／ニ Vテモラウ」表現に対してはこのほか、“请・N(動作主体)”と“給・N(間接的受け手)+V”が共起した中国語表現が対応する以下のようなケースが存在する。

(34) 请老师给我们讲了日本的习惯。

(《現代日本語語法》：603)

(34)’ 先生カラ／ニ日本の習慣を教えテイタダキマシタ。(同上を一部修正)

(35) 请老王用日语给我们唱个歌吧。

(《日本語慣用型》：237)

(35)’ 王さんニ日本語で一つ歌を歌ッテモライ

ましょう。(同上)

(36) 請干部来給咱们主持一下。

(奥津・徐 1982 : 99、赵树理)

(36)' 幹部ニ頼んで口をきいテモラッタ方がええ。(同上)

これらの表現例においては、“让・N+V”形式に“給・N”が含まれた(31)、(31)'および(32)、(32)'の場合と同様に、話者が同時に動作・行為の間接的受け手でもあり、その受け手が表現の中心に置かれている点で「N・カラ／ニ Vテモラウ」表現と共通している。同様のことは、以下のような願望・要求を表わす表現についてもあてはまる。

(37) 希望你給我跑一趟。

(『岩波 日中辞典』「もらう」の項)

(37)' 君ニ行っテモライたい。(同上)

(38) 小孩子求妈妈給穿上鞋。

(《現代日語語法》: 603)

(38)' 子供が母ニ靴を穿かせテモライマシタ。

(同上)

(37)、(37)'における間接的受け手は言うまでもなく話者(我／わたし)であり、表現の中心に置かれるべき成分であるが、(37)'においてはそれが自明のこととして表出されていない。日中両言語ともに間接的受け手が表現の中心に置かれている場合、(30)、(30)'および(33)、(31)'の対応例に比べると両言語間における表現構造上の相違が小さく、中国語表現の発想は日本語表現のそれに近くなっているということができよう。

「N・カラ／ニ Vテモラウ」表現は、相手に動作・行為を願ったり要求したりするのに用いられることが多く、以下のように“給・N”を用いないで“让”、“请”、願望・要求を表わす動詞のみによる中国語表現が対応するケースがめずらしくない。

(39) 我让朋友寄来杂志。(林璋 1998 : 19)

(39)' 友達カラ／ニ雑誌を送っテモラッタ。

(同上、『日本語教育事典』: 209 を一部修正)

(40) 請李老师教日语。

(《現代日語語法》: 603)

(40)' 李さんカラ／ニ日本語を教えテモライマス。(同上を一部修正)

(41) 我要他赔钱。(奥津・徐 1982 : 101)

(41)' ぼくは彼ニ弁償しテモラウ。(同上)

このような対応例に着目したものが奥津・徐 1982 であり、「テモラウ」を用いた表現に対応する中国語表現として、“请”、“让”、“叫”、“要”をはじめとする様々な動詞(いわゆる兼語式を構成する動詞)を用いたものを取り上げている。ちなみに、日本語における使役と「テモラウ」態との関係については仁田 1991 : 53-55 の記述があり、これらをもとに、日中両言語間にみられる使役表現と受益表現の使い分けの相違について考察を深めるのも有意義である。

“让”などの使役動詞、“请”、願望・要求を表わす動詞を用いた中国語表現は、“給・N”の有無にかかわらず、いずれも間接的受け手(非動作主体)の側からコトガラを表現したものである。この点においては、

(42) 向山本借了香港电影的录像带。

(《中文版 日語句型辞典》「てもらう」の項)

(42)' 山本さんニ香港映画のビデオを貸しテモラッタ。

(『日本語文型辞典』「てもらう」の項)

(42)" 山本さんニ香港映画のビデオを借りた。

における(42)の場合も同様であり、「N・カラ／ニ Vテモラウ」形式に対しては、奥津・徐 1982 : 103 が言うように、対応すべき中国語表現のスタンダードな形式がなさそうである。

(4.2 以降は次号に続く)

注

1) 本稿では、利益の授受を表わす点において共通の働きを有する補助動詞「テヤル」や「テサシアゲル／テクダサル」との相違を問題とはせずに「テアゲル／テクレル」で代表させる。「テモラウ」と「テイタダク」についても同様である。利益の授受を表わす補助動詞については奥津 1984 : 65 を参照。ちなみに、日本語授受動詞表現の使い分けについて考察を行なったものに同 1979 がある。

2) これらの点については、奥水 1985 : 279、『日本語教育事典』: 209 を参照。

- 3) そのようなケースとして、荒川は“我给你打(个)电话。”、“我给大家介绍介绍。”などを挙げている。
- 4) “在”については成戸 2009 : 62-63 を参照。“給”にみられる語彙的意味の強弱について示唆したものとしては荒川 1985 のほか、木村 2000 が挙げられる。同 : 32 は、“给他送报纸(他二新聞を届ける)”におけるような、「与える」という意味を語彙的に含みもつ類の動詞といっしょに用いてモノを与える相手を導く用法の“給”もいわゆる「授与」の意味をひきずっているとしている。
- 5) 成戸 2009 : 76-81 では、前置詞“在”と“給”、“对”、“往”、“向”、“朝”との相違について考察を行なった。
- 6) この点については成戸 2009 : 76-77 を参照。(13)’の“公社”は、“給”に付加されることによって場所よりは組織としての概念に傾いており、有情物(ヒト)に準ずるものとみてさしつかえない。
- 7) “給”が“把”と同様に動作・行為の直接的受け手を示す働きをする点については、奥水 1985 : 281 を参照。ちなみに『岩波 中国語辞典(“給”の項)』には、“V 给”形式と共起する“玛力给果碟子递给大家了。(メリーは果物皿ヲ一同にさしだした。)”のような表現例が挙げられている。刘丹青 2003 : 283 には、呉語においては動作・行為の直接的受け手、間接的受け手が、やりもらいを表わす動詞から派生した同一の前置詞によって示されるケースが存在する点についての記述がみられる。
- 8) 奥水 1985 : 281 には、(25)に対応する日本語表現として(25)’、(25)”のほか、さらに「わたしはかれニ代ワッテなおした。」が挙げられている。
- 9) 奥津 1984 : 7、71-72 には、日本語における授受動詞がいわゆる二項目構造(客観的には一つである出来事に対して視点の置き方の異なる二つの動詞が存在する)である旨の記述がみられる。奥津はそれらのうち、与え手に視点を置くものを給与動詞、受け手に視点を置くものを取得動詞としている。この点については、さらに同 1983 : 23 を参照。

引用文献

- 愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』, 燎原(初版 1968)。
- 愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典(増訂第二版)』, 大修館書店(1987)。
- 荒川清秀 1985. 「動詞(4) [動詞とその相手]」, 『中国語』1985 年 10 月号, 大修館書店, 14-16 頁。
- 奥津敬一郎 1979. 「日本語の授受動詞構文 — 英語・朝鮮語と比較して — 」, 『人文学報』, 東京都立大学人文学部, 1-27 頁。
- 奥津敬一郎・徐昌華 1982. 『『～てもらう』とそれに対応する中国語表現 — “请”を中心に — 』, 『日本語教育』第 46 号, 日本語教育学会, 92-104 頁。
- 奥津敬一郎 1983. 「授受表現の対照研究 — 日・朝・中・英の比較 — 」, 『日本語学』1983 年 4 月号, 明治書院, 22-30 頁。
- 奥津敬一郎 1984. 「授受動詞文の構造 — 日本語・中国語対照研究の試み — 」, 金田一春彦博士古希記念論文集編集委員会『金田一春彦博士古希記念論文集 第二巻 言語学編』, 三省堂。
- 郭春貴 2001. 『誤用から学ぶ中国語 — 基礎から応用まで — 』, 白帝社。
- 木村英樹 2000. 「“給”が使えない『ために』」, 『中国語』2000 年 10 月号, 内山書店, 32 頁。
- 倉石武四郎・折敷瀬興編『岩波 日中辞典』, 岩波書店(1983)。
- 倉石武四郎『岩波 中国語辞典 簡体字版』, 岩波書店(1990)。
- グループ・ジャマシィ編著『日本語文型辞典』, くろしお出版(1998)。
- グループ・ジャマシィ編著《中文版 日本語句型辞典(『日本語文型辞典』中国語訳(簡体字版))》, くろしお出版(2001)。
- 香坂順一編著『現代中国語辞典』, 光生館(1982)。
- 奥水優 1985. 『中国語の語法の話 — 中国語文法概論』, 光生館。
- 成戸浩嗣 2009. 『トコロ(空間)表現をめぐる日中対照研究』, 好文出版。
- 西横光正 1993. 「現代中国語介詞研究(二)」, 『語学研究』第 72 号, 拓殖大学語学研究所, 33-57 頁。
- 仁田義雄 1991. 「ヴォイス的表現と自己制御性」, 仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』, くろしお出版, 31-57 頁。
- 日本語教育学会編『日本語教育事典』, 大修館書店(縮刷版 1987)。
- 北京大学中国語言文学系現代漢語教研室編／松岡榮志・古川裕監訳『現代中国語総説』, 三省堂(2004)。
- 森田良行 1988. 『日本語の類意表現』, 創拓社。
- 楊凱栄 1994. 「受益表現について — “给”と『てあげる、てくれる』との比較を中心に — 」, 『教養研究』第 1 巻第 1 号, 九州国際大学教養学会, 21-42 頁。
- 楊凱栄 2009. 「中日受益表現と所有構造の対照研究」, 『日中言語研究と日本語教育』第 2 号, 好文出版, 1-12 頁。
- 来思平・相原茂著／喜多山幸子編訳『日本人の中国語 誤用例 54 例』, 東方書店(1993)。
- 刘月华・潘文娛・故諱著／相原茂監訳『現代中国語文法総覧(上)』, くろしお出版(1988)。
- 呂才楨・戴惠本・賈永芬著／荒屋勸編訳『日本人の誤りやすい中国語表現 300 例』, 光生館(1986)。

呂叔湘主編／牛島徳次・菱沼透監訳『中国語文法用例辞典－
《現代漢語八百詞 増訂本》日本語版』，東方書店(改訂版
2003)。

北京大学中国语言文学系現代漢語教研室編《現代漢語(重排
本)》, 商務印書館(2004)。

陳書玉編《日語慣用型》, 商務印書館(1987)。

吉林大學漢日詞典編輯部《漢日辭典》, 吉林人民出版社
(1982)。

林璋 1998. <日語授受關係試析>, 《日語學習與研究》1998
年第1期, 對外經濟貿易大學《日語學習與研究》編輯委員
會, 18-21 頁。

劉丹青 2003. 《語序類型學與介詞理論》, 商務印書館。

劉月華・潘文娛・故耕《實用現代漢語語法》, 外語教學與研
究出版社(1983)。

呂叔湘主編《現代漢語八百詞》, 商務印書館(1 版 1980)。

呂叔湘主編《現代漢語八百詞(增訂本)》, 商務印書館(1999)。

穗積晃子著／顧海根・李強譯《中國人學日語常見病句分析一
百例》, 科學普及出版社(1987)。

肖輝・高克勤主編《中級日語》, 武漢大學出版社(1997)。

謝秀忱編著《現代日語語法》, 北京師範大學出版社(1981)。

中國社會科學院語言研究所詞典編輯室編《現代漢語詞典》,
商務印書館(5 版 2005)。

(原稿受理年月日 2014 年 11 月 27 日)